

開かれた大学をめざして 一積極的に成人学生を受入れよう

溝上智恵子
図書館情報メディア研究科教授

開かれた大学

筑波大学といえば「建学の理念」。確かにどこの大学にもある「建学の理念」ですが、本学ほど自らを語る時に「建学の理念」に言及する大学は、日本国内にはそれほど多くはないでしょう。

さてこの建学の理念の1つに、開かれた大学という考えが掲げられています。この考えに基づき、筑波大学では開学当初から公開講座を積極的に展開する一方、社会人学生を主として受入れる大学院を誕生させました。とはいっても、その数は全学的にみればまだ少数ではないでしょうか。生涯学習社会が進展するなか、もっと多くの社会人学生を受入れるべきではないかと思います。

ところで、社会人学生とはどのような人たちなのでしょうか。意外と定義するのが難しいのです。大学が実施する「社会人特別入試」を受験し入学した学生のみを社会

人学生としてカウントして統計データが公表されているようですが、もちろん一般入試により受験し入学てくる職業人学生もありますし、専業主婦もいるでしょう。あるいは定年退職後に入学する学生さんもいるかもしれません。については学校卒業後、一定の期間を経て再び大学へ入学した学生を、ここでは社会人学生ではなく、「成人学生」と呼び、その受入れについて考えてみたいと思います。

成人学生の受入れ

今、世界の高等教育では実に多くの成人学生が学んでいます。こうした成人学生は、フルタイムで学生生活を送る者と、仕事や家庭をもちながら、一定の時間を学生生活にあてるパートタイムの学生の2種類に分かれています。パートタイム学生とは、夜間コースだけに在籍しているわけでもありません。それぞれの生活時間に応じて、特

定の曜日のみ大学で学ぶ学生も含まれます。よって、卒業や修了にかかる時間も、フルタイム学生より多くなります。

日本でも長期履修制度により、パートタイム学生の受け入れが可能になっていますが、現実にはまだ少数派のようです。

一方、よく知られているパートタイム学生の受け入れ制度の1つに、夜間開講制の大学院があります。筑波大学では1989年に修士課程教育研究科カウンセリング専攻と経営・政策科学研究科経営システム科学専攻の2専攻で全国初の夜間開講制大学院を設けるなど、積極的に受け入れをはかってきました。その後、ビジネス科学研究科や体育研究科へと拡大し、2005年には夜間の法科大学院が開設される予定です。また一部の研究科では昼夜開講制により教育が行われています。このように本学でも成人学生が学ぶ場は提供されています。

図書館情報メディア研究科の成人学生

ではここで、私が所属している図書館情報メディア研究科の状況を少し紹介しましょう。現在、図書館情報メディア研究科の大学院の場合、博士前期課程学生の約25%強が成人学生です。彼らの多くは、現職者です。講義科目や演習科目は、東京の大塚地区にある「東京サテライト」で夜間に開講される授業を受講し、あるいは科目

によってはテレビ会議システムを使用して、春日キャンパスに教官がおり、学生は大塚地区でリアルタイムの授業を受講する形で授業が展開されています。

もちろん、春日キャンパスにも成人学生がいますので、時には大塚地区的授業をテレビ会議システムにより、逆に春日キャンパスで学生が遠隔授業を受けるといったケースもあります。

こうした成人学生の修論指導は、東京サテライトで行われる他に、電子メール等を利用したり、あるいは夏期休暇など長期の休みに春日キャンパスにおいて対面指導などにより実施されています。

私自身が経験したこれらの遠隔授業は、確かにまだシステムとして改善すべき点も少なくありませんが、教員も学生も双方にある意味での「慣れ」も必要で、当初は戸惑っていても、次第に遠隔教育システムを使いこなすことができるようになります。

もっとも成人学生と一緒に授業を行うことで一番印象的なことは、実に活発な意見交換と質疑応答が可能な授業を展開できることです。成人学生は多様な経験や知識を有していますので、積極的に授業に参加してきます。時には教員側が戸惑うようなするどい意見を述べます。

現職者は仕事と勉強の両立で忙しいはずなのに、仕事場での経験を活かして、しば

しばフルタイムの学生以上に発表資料等を用意してきます。彼らのおかげでまさしく双方向の参加型授業を開拓することができます。

ではいいことばかりかと言いますと、正直に申し上げれば、教員側の授業準備は大変です。双方向型の参加型授業は、教員側の準備があればこそ、充実した授業になるわけで、ただ学生に意見を発表させているだけでは、成立しません。また教員側が一方的に講義形式で授業を開拓してしまうと、授業終了後、学生は「今日は一方向でしたね」と、鋭くしかしあつくりと感想を述べます。こうした積極的な姿勢は、学部卒業後ただちに進学してきた若い学生にも強い刺激を与え、彼らも積極的な姿勢を見せるようになります。言い換えると双方どころか三方によい刺激を与えているわけです。

的に実施しているため、夜間制大学院の促進をはかってきたのでしょうか、「働く人＝夜間のみ自由」とは限りません。人によっては特定の曜日に学ぶ時間を作ることができるという人もいるでしょう。就労形態も多様化している今日、もっと昼夜開講制の研究科を拡大してはいかがでしょうか。それから、筑波大学ではまだ長期履修制度が導入されていません。生涯学習社会の実現にむけても、成人学生が学ぼうという意欲をもった時、時間や経済的理由から断念することがないよう、一刻も早く長期履修制度を導入すべきではないでしょうか。今後ともぜひ成人学生の受け入れ拡大をめざしてほしいと願っています。

(みぞうえ ちえこ／教育文化政策)

受け入れのための支援策を

以上のように、成人学生を受け入れることで互いによい影響を与えていくというのが私の意見であり、これからも大学全体として、こうした成人学生の受け入れを積極的に支援していくべきだと考えています。

具体的には、確かに筑波大学は夜間制大学院では先駆者でしたが、成人学生の全般的な受け入れとなると、必ずしも十分とはいえない状況にあります。現職者教育を重点